



TITLE:

アリストテレスの表券貨幣説--ノミスマの射程-1-

AUTHOR(S):

本山, 美彦

CITATION:

本山, 美彦. アリストテレスの表券貨幣説--ノミスマの射程-1-. 経済論叢
1990, 145(4): 427-447

ISSUE DATE:

1990-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/139264>

RIGHT:

アリストテレスの表券貨幣説

——ノミスマの射程（1）——

本 山 美 彦

は じ め に

シュンペーターによれば，貨幣論には金属貨幣説（metallism）と表券貨幣説（cartalism）の二種類があり，それぞれが，理論的（theoretical）なものと実際の（practical）なものに区分される。つまり，理論的金属貨幣説，実際の金属貨幣説，理論的表券貨幣説，実際の表券貨幣説という四つの立場に貨幣論は区分される。しかし，それらは，固定的なものでなく複雑に入り組んでいて，ある理論家の貨幣論的立場を判定することは困難であると言う（Schumpeter, [33], pp. 288-89; 邦訳，第1分冊，602-3ページ）。その理由を彼は四つ挙げている。

一つには，貨幣の歴史的起源をもって本質論とする誤解が多く見られることである。それは，近代に比べて過去の制度が単純であったという誤った常識からきている。しかし，実際には社会諸制度を経済学的に理解しようとすれば，原始的な形態の方が，近代のそれよりもはるかに複雑なものである。この誤った常識のせいで，たまたま若干の商品が貨幣として過去に使用されていた事実をとらえて，それを起源と見なし，貨幣の本質を金属貨幣と理解してしまったり，逆に，過去に表券貨幣を発見して，それを本質とする，という単純な弊に我々はしばしば陥る。歴史はどの時代にも相反する事実を内包するものである。プラトンが表券貨幣説の始祖とされる一方で¹⁾，アリストテレスが金属貨幣説

1) プラトンの貨幣理論をシュンペーターは表券貨幣説の嚆矢として見る。シュンペーターの表券貨幣説はつぎのように定義される。

の始祖と見なされている通説を比較して、プラトンが先だから、貨幣の本質は表券貨幣にあると断定することの馬鹿らしさを考えて見れば、歴史起源説の無意味さは明らかであろう。総じて、ものごとの原始的形態なるものの指摘は、論理的本質点を明らかにするよりむしろ覆い隠す恐れをもつ。

二つには、理論と実際とを安易に混同する弊を我々がもつことにある。通貨の特権を振り回す外国への嫌悪から金本位制を主張したからといって、その人が理論的金属貨幣説であることにはならない。あるいは、抽象的には理論的金属貨幣説を信奉する政策担当者が、通貨増発による経済浮揚策を反射的に採用したという例も過去に多く見られる。このように、理論的金属貨幣説と実際の表券貨幣説の両方を一人の理論家に見出すことは容易である。三つには、金属貨幣説にしろ、表券貨幣説にしろ、厳格に相互排除的なものではなく、それぞれが非常に多くの微妙なニュアンスをもっていることにある。四つには、立場の表現は明確でも、論理がつきつめて展開されているとは言えない場合が多いことにある。(Ibid, p. 290, note; 邦訳, 第2分冊, 605ページ)²⁾。

「プラトンは、貨幣とは交換を容易にする目的のために工夫された『象徴』であるとの考え方をついでに述べている。……たとえば、金と銀とを〈貨幣として〉用いることに対する彼の反対意見とか、国内通貨は海外にあってはなんの役にも立たないという彼の考え方に見られるように、貨幣政策に関する彼の教説は、貨幣の価値が貨幣を作る素材から原理的に独立しているという考え方の論理的帰結と、実際的にも非常によく一致するものであるという点を見過すべきではない」(Schumpeter, [33], p. 56; 邦訳, 第1分冊, 108ページ)。ちなみに、シュンペーターが指摘するプラトンの論点の該当箇所は以下のものである。

「わが国民は、自国内では価値をもつが他国では無価値であるような鑄貨を保有すべきである、と私は主張する。国際的なヘレニック貨 (Hellenic coinage) について言えば、外国への訪問、あるいはわが国の大使やその他の使節として誰かを外国に派遣しなければならない、等々の目的への便宜として、国家が常時それを保有していなければならないものである。外国に行かなければならない個人も、自己の行政官のもとを去る時にそれを入手し、それを余らせて帰国すれば、彼は国家にそれを差し出して同価値の国内鑄貨を入手するであろう」(Plato, [28], p. 742)。

プラトンは国内鑄貨が国際的な素材の価値をもつ必要はなく、国際的には国際通貨である外国通貨を使用すれば良いと言っているにすぎない。国際的には国内のような素材の価値から離れた鑄貨の交換価値が通用しないからである。たったこれだけのことでプラトンが表券貨幣説であったことの証拠とするならば、アリストテレスの国家によって刻印された貨幣などはまさに国際的価値をもたない表券貨幣そのものにならないだろうか。しかも、アリストテレス『ニコマコス倫理学』には、本稿で引用した引用文4がある。

2) シュンペーター自身は理論的金属貨幣説の立場に与していない。

「理論的金属貨幣説の立場が支持されえないことを、私は当然だと思っている。商品として」

このような困難さを意識しながらも、シュンペーターは理論的金属貨幣説の嚆矢をアリストテレスに求めた。しかし、この結論は、アリストテレスを市場経済分析論に強引に引きつけて得られたものであった。当然のことながら、シュンペーターはアリストテレスの均等性の概念のもつ意味を見落とした。それはまた、マルクスの誤解でもあった。彼らだけではない。アリストテレスに経済学の萌芽を見ようとした多くの論者が同じ誤りを冒したのである。それは、経済を共同体の政治的枠組みの中に押し込めようとしたアリストテレスの意図とは逆に、アリストテレスの中に政治の枠から自立した市場経済の分析を見ようとする誤りであった。このことが、貨幣を制御可能なものに位置づけようとしていたアリストテレスの理論的取り組みの重要性を経済学説史家に無視させてきた原因であろう。

本稿では、アリストテレスが金属貨幣説であったのか、なかったのかの確定をするところに力点が置かれているわけではない。私自身はアリストテレス表券貨幣説の立場に立っているが、そのような判定自体にそれほど大きな意義があるとは思われない。それよりも重要なことは、貨幣を認知しながらも貨幣に対するアリストテレスの強い警戒と嫌悪のありかたを知ることである。アリストテレスのこの揺れの中から、私たちは共同体関係を維持するために社会的に

の交換価値が貨幣としての価値の理論的基礎を与えているので、純粋理論の問題として、貨幣は本質的には一種ないしは数種の商品から成り立つか、それらを背景としなければならない、と主張することは当然にも正しくない。……貨幣の本質や論理は……貨幣の材料を構成するある商品としての性質とはまったく無関係である」(Schumpeter, [33], p. 290, note; 邦訳, 第2分冊, 605ページ)。

便利さから特定の商品が貨幣として選ばれたとしても、そのことと貨幣の本質とは異なるというのである。

また、マルクスやシュンペーターと同じくアリストテレスに金属貨幣説を見るのは A. E. Monro^e であるが、ここではアリストテレスの文章の捏造がある。

「彼(アリストテレス)は、〈生活の目的にとって有益で適用できる〉ような素材をもつものに貨幣を限定することによって、〈健全通貨〉擁護の長い文章を書いている。このように言うことができる理由はつぎの文章に、つまり、貨幣は一般的に受け取られなければならないと彼が言っている箇所におそらくは見られる。直接に有益な商品だけがこの資格をもつのである」 Monro^e, [25], p. 7)。

しかし、アリストテレスにはこのような文章はない。

管理された貨幣を理想的な姿と見なす論理が出てくることに気づくのである³⁾。

にもかかわらず、シュンペーターとかマルクスといった代表的な経済学者のアリストテレス理解は、生産費用論、交換価値論の嚆矢ではあっても、時代的な制約がアリストテレスの市場価格論、価値形態論の十分な展開を妨げたとして、アリストテレスのこの重要な点を切り捨ててしまった。その切り捨ては、市場経済論に射程を限定しすぎたこと、一般的等価物としての貨幣にこだわりすぎて、物的経済と社会的心理を攪乱する「信用」の側面を軽視したことの結果である。そこで本稿では、貨幣に対するアリストテレスの警戒を探ることによって、貨幣制御が必要になるという「ノミスマ」（社会的合意の産物）の世界、つまり、経済現象と社会現象との接点である貨幣に接近する手掛かりを得ることを課題とする。

I 自然 (phusis) の産物と人為 (nomos) の産物

周知のように、マルクスは、アリストテレスが価値形態論の入口に立ち、貨

3) 「貨幣は、需要を代表する人為の産物であって、けっして自然の産物ではないという理路になる。需要自体が共同体の交換関係においては、ノモスに拘束される慣習的な需要に基づくものでなければならない。つまり、交換自体が共同体関係 (koinonia) の基礎にあるというよりも、「共同体の枠内における交換関係」(les relations d'échange qui ont pour cadre le communauté) と表現された方がよい」(Will, [44], p. 215)。

コイノニアこそは、アリストテレスの『政治学』と『倫理学』の中心概念である。その最高位の概念はポリスそのものであり、低い概念では種々の仲間関係である。人は、本来家産的な存在 (zoon oikonomikon), 政治的な存在 (zoon politikon), 共同体的な存在 (zoon koinikon) である。そのような、コイノニアが維持されるためにはいくつかの条件が必要である。構成員が自由人であり、共通の目標をもつこと。共有財産が存在していること。構成員相互間に友愛 (philia) と信義 (dikaion) との感情が定着していること。このように、キー概念としてのコイノニアには多様な意味が込められている (Finley, [10], p. 47)。実際、アリストテレスは、「国家の維持は比例的な互恵性に依存する」(Aristotle, [3], 1133a3; 邦訳, 108ページ) と言う。こうした意味において、少なくともギリシャ人にとって、ノモスの人為性は肯定されるべきものだった。

このような共同体関係維持の視点から貨幣を見直すとき、貨幣が単に交換の媒介物、あるいは、価値の尺度に限定して理解されることは許されないだろう。貨幣は共同体維持に貢献するものでなければならない。つまり、それは、制御されなければならないのである。共同体破壊的な貨幣が出てくれば、それは廃止され、別の貨幣が定められなければならないものとなる。このような制御可能な貨幣とは、金とか銀とかの人為による制御不可能な自為の産物であってはならないのである。引用文4はそのように読まれるべきだろう。

幣を神秘的なものとする弊害を克服していたと理解した。マルクスによれば、貨幣を神秘的なものとして理解しようとする人々は、その特殊な性格から自己の価値を付与されると理解してしまい、貨幣が自己の内的価値を素材の価値、正しくは素材の等価形態をもつからこそ価値があるという点を見逃してきたという。貨幣を神秘的なものとして理解してしまうのも、この価値形態に対する無知のせいである。この無知から脱して、貨幣とは、なんらかの任意の他の商品に自らの商品価値の表現を見出すという単純な価値形態の発達した姿が取り結ぶ商品関係にすぎないことを初めて理解したのはアリストテレスである、とマルクスは評価する。本稿（次号）の注14)と注16)で引用しているアリストテレスの章句（引用文16, 17, 18）を検討してマルクスはつぎのように言う。

「この価値表現を潜ませている価値関係は、それ自身として、家がベッドに質的に等しいこと、そしてこれらの感覚的に異なるものが通約しうる (kommensurable) 大きさとして相互に関係できるのは、それらが本質の同質性 (Wesensgleichheit) をもつからであることを条件にしている。彼〈アリストテレス〉は言う。〈交換は同質性 (Gleichheit) なしには存在しえない。だが、同質性は通約できる性質なしには存在できない〉と。しかし、彼はここで立ち止まってしまう。価値形態をそれ以上分析することをやめてしまうのである。〈しかし、このように種類の異なったものが通約できるということ〉、すなわち、質的に同一であるということは〈真実には不可能である〉。この等置 (Gleichsetzung) は、ものの真の性質に無関係なものでしかありえない。等置は、ただ〈实际的必要に対する緊急措置〉でしかありえないと」(Marx, [21], SS. 73-74; 邦訳, 第1分冊, 78ページ)⁴⁾。

「商品価値の形態においては、すべての労働が等しい人間労働として、したがって、同質的に作用しているものとして表現されているということを、アリストテレスは、価値形態自身から読み取ることができなかった。という

4) 本稿では、邦訳書のページ数は示すものの、翻訳の文章自体は邦訳書のそれに即していない筆者の翻訳である。

のは、ギリシア社会は奴隷労働に基づいており、それゆえに、人間とその労働力の不等さを自然的基礎としていたからである。価値表現の秘密、すなわち、一切の労働が等しく、また等しいと置かれるということは、一切の労働が人間労働一般であるから、そしてまたそうあるかぎりにおいてのみ言えることであり、したがって、人間は等しいという概念が、すでに一つの強固な国民的精神となるようになって、初めて解きうるものなのである。しかし、このことは、商品形態が労働生産物の一般の形態であり、したがって、商品所有者としての人間相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会になって初めて可能である。アリストテレスの天才は、まさに彼が商品の価値表現において、同質関係を発見しているということに輝いている。ただ彼の生活していた社会の歴史的限界が妨げとなって、そもそも〈真実には〉この同質関係は、どこにあるのかを見出さなかったのである」(Ibid., S. 75; 邦訳, 第1分冊, 79ページ)。

マルクスは、アリストテレスが用いた *isotes* という語に *Gleichheit* という訳語を当てている。この場合の *Gleichheit* をマルクスは *Wesensgleichheit* と同じ意味に用いることは、この文章の前後関係から見ても明白であろう。そこで、本稿ではアリストテレスの *isotes* に均等性、マルクスの *Gleichheit* に同質性という訳語を当てることにする。商品が交換される場合に、第三の共通なもの、つまり、交換される両者には、「本質的に同一のもの」(*Wesensgleichheit*) があるからこそ両者は通約されるとマルクスは考え、その嚆矢をアリストテレスに見出したのである。

しかし、望月俊昭氏の指摘によれば、マルクスはアリストテレスの論理展開とは異なった理解をしてしまい、均等性と通約可能性との叙述順序が逆になっている(望月俊昭, [24], 180ページ)。マルクスでは、同質性(アリストテレスの均等性)が交換される両者にあるからこそ通約が可能であると述べられているが、アリストテレスの章句では逆であり、貨幣(*nomisma*)による通約(*symmetria*)があるからこそ、均等性(*isotes*)が確保され、そのことによっ

て交換 (*allage*) が実行され、共同体社会 (*koinonia*) が維持されるという順序の記述になっているのである。このようにアリストテレスの理路を逆にマルクスがとらえたのは、アリストテレスの均等性 (*isotes*) を同質性 (*Wesensgleichheit*) に解消してしまったことと無関係ではないだろう。この点を確認するために、アリストテレスの章句を引用しておこう。以後、アリストテレスの引用分にかぎって通し番号をつけることにする。

(引用文1) 「詳しく言えば、このような共同関係が生じるのは二人の医者間においてでなく、医者と農夫のように総じて異なった人々の間においてであって、均等人々の間においてではない。しかし、人々は均等化されなければならない。事物が交換されなければならないときに、それらが何らかの仕方と比較可能なものにならなければならないのもその理由による。この目的のために貨幣は発生した。それは、ある意味での媒介者である。貨幣こそは、過剰や不足のあらゆるものを計量する。つまり、貨幣は一軒の家、一定量の食品がいく足の靴に等しいのかを計量する。こうして、大工が靴工に対するように、一軒の家がいく足かの靴に対することが必要になってくる。このことがなければ、交換も共同関係もありえない」 (*Ibid.*, 1133 a 17-23; 邦訳, 109ページ)。

異質な人々が存在するからこそ、共同体的な関係が生じる。その関係は交換によって維持されるものであるが、異質な人、したがってまた、異質な生産物が交換されるためには、交換の正義を守るために、もともと異質なものがなんらかの方法で均等化されなければならない。この手段は貨幣によって提供される。この場合の貨幣とは交換される異質な事物と共通の関連を維持できる第三のものである。

(引用文2) 「だから、……あらゆるものを一つのものによって計量することが必要である。この一つのものとは、あらゆるものを真実に包含する需要 (*creia*) のことに他ならない。もし、必要が少しも存在しないか、あるいは、双方に同様の仕方では存在しないならば、交換は、少なくとも現在のような姿

では行なうことはできないだろうからである」(Aristotle, [3], pp. 1133 a 27-29; 邦訳, 109ページ)。

異質なものを計量して均等化させるものを説明するさいに、アリストテレスは貨幣価値による比較を問題にしたのではなく、需要 (*creia*) との関連で論じたという点は注意されねばならない。この需要という言葉はアリストテレスにとって非常に重要な概念である。アリストテレスは、生産物の等置をマルクスのように「実際の必要に対する緊急措置」として論じたのではない。そもそも、アリストテレスにそのような文言はない。彼が言っているのは、本質的に差異のあるいろいろなものを通約するのは、ただ申し合わせ、ノモスに基づく、ということである。通約するものは、マルクスがイメージにおいたような、三角形の面積、酸、重量といったようなものとのアナロジーではなく、あくまでも、人々の需要に基づくものである。この場合の需要というのは、後述するように、けっして、商品に対する消費欲望に限定されるものではなく、良好な共同体関係を維持するという道徳的な規範を含むもので、古代ギリシャ哲学の文脈では道徳上の実践知 (*phronesis*) というものを表している。

少し横道に逸れるが、ここで、アリストテレスの興味ある社会科学観を紹介しておこう。アリストテレスによれば、学問には厳密さが要求される分野もあるが、厳密さを要求すること自体が、精神の未開発状態の現れであると判定される分野もある (Castoriadis, [8], p. 689)。たとえば、社会を論じるときには数学的厳密さは問題の所在をあいまいにさせる、とアリストテレスは言う。

(引用文3)「おおよそのことがらを、おおよその出発点から論じて、同じくおおよその結論に到達しうるならば、それでもって満足しなければならないだろう。……すなわち、そのことがらの性質の許す程度の精密さをそれぞれの領域において求めることが、教養あるものにはふさわしい。その場かぎりの仕方て語ることが数学者に許すことができないのなら、弁論の専門化に厳密な〈論証〉を要求することも同じように誤っていると見られるであろう」(Aristotle, [3], 1094 b 20-25; 邦訳, 18-19ページ)。

つまり、何を目的とするのかによって出される結論が異なる社会科学においては、過度の厳密性、市民の常識からはかけ離れすぎて市民の合意を得られにくい分析は無意味であるとアリストテレスは考えている。「需要」とは、このような社会的要請を表現するものである。それは、けっして、決定論的なものではなく、ましてや便宜的なものでもない。異質な生産物、異質な人々の労働等のあらゆるものを包含するもの、それが需要である。交換にあたって必要が少しも存在しないか、もしくは双方で同じようなレベルで存在しない場合、異質なもの同士の交換は行われぬ。あらゆるものの場合を包含できる需要が存在して初めて社会は維持される。この需要は自然のもの (*phusis*) にはない。その需要はただ「申し合わせ」に基づくもの、つまり、人為的なもの (*nomos*) によるものでなくてはならない。需要を代表する、あるものによってこそ、あらゆるものが一つのものに計量されるのである (引用文4, 参照)。この均等化は、厳密な数学的論証を必要とするものではない。しかし、それはノモスに基づく人々の合意を必要とするのである。

アリストテレスは、異質な労働の交換を律する内在的なものを経済学的に発見しようとしていたのではない。彼は依然として人間労働の異質性を主張していたのである。自然のものとしては異質のままにとどまっているものを人為的に計量することによってのみ、共同体は維持される。アリストテレスの意図はここにあった⁵⁾。マルクスでなくとも、アリストテレスの中に奴隷制の擁護論を嗅ぎ取ることは容易である。しかし、アリストテレスの全体の文脈からこの差別意識のみを切り離して論じることが、かえってアリストテレスの真意を理解できなくさせるであろう。このことは、逆に問うて見ればよい。そもそも、抽象的な人間労働に同質性を見ようとしたのは、資本家的な社会における具体

5) 商品と貨幣の間には「質的に同じ性質をもった諸事物におけるような共通の尺度は存在しない」(Simmel, [35], S. 109; 邦訳, 166ページ)としたジンメルも、測定の困難さを自覚し、共通の本質があれば、測定が容易になることをも告白している。しかし、そのような便利さを求める誘因があっても、そのことは、「貨幣の本質に由来する内的な理由に基づくものではない」となお主張する (*Ibid.*, S. 139; 邦訳, 204ページ)。

的な人間労働が疎外されていることを告発する視点を設定するためのものであった。その文脈を見過して、抽象的人間労働の同質性を指摘できるのは、人間の平等さを認識できる社会になったからであると言ってしまえば、論理は完全に逆転してしまう。アリストテレスにあっては、人間が(労働に限定されない)異質であるからこそ、それぞれの「もち分」に応じて共同体に貢献できるとの視点において、その共同体関係を取り結ぶさいの正義に対する合意形成の是非がなによりも重要な論点となったのである。したがって、アリストテレスは経済学を構築しようとしたのではなく、経済をも包み込む政治的な環境を問題にしていたのである (Castoriadis, [8], p. 690)。国家社会の善を実現する政治学があらゆる学問に優越すると主張するアリストテレスは (Aristotle, [3], 1094 b 1-10; 邦訳, 18ページ), 政治的善の理解が各人において多様であることを重視するゆえに、このようなものを探る論理の出発点を自然的なものではなく、人為的なノモスに (*Ibid.*, 1094 b 15; 邦訳, 18ページ), 慣習的な人々の合意の産物に求めようとしたのである。

(引用文4)「ただ申し合わせに基づいて需要を代表しているようなものが貨幣である。このような事情があって、貨幣はノミスマ (*nomisma*) と呼ばれているのである。それは自然的 (*phusis*) なものではなく、人為的 (*nomos*) なものであり、変更することも廃止することも、我々の自由だからである。こうして、農夫が靴工に対するように、農夫の生産物が靴工の生産物に対するために均等化されたならば、取り引きは互惠的なものになるだろう」(Aristotle, [3], pp. 1133 a 28-30; 邦訳, 109ページ)。

ここには、貨幣が自然のものとして存在するのではなく、法の産物であるとの見方が示されている。自然のものというのは、このさい、金とか銀とかの自然的な素材のことを言っていると理解する方が素直であろう。なぜ、自然のものが貨幣であってはならないのか。この点をアリストテレスは需要というものの性質に求める。上記引用文3の直前でアリストテレスは誰もがそれに対して需要をもつといったものは自然界には存在しないと言う (次号の引用文13)。

金であれ、銀であれ、全員がそれに対して需要をもつものではない。しかし、申し合わせという非自然界の産物ならば、人々のすべての需要を代表することができるのではないか。誰もが貨幣なるものを需要するという申し合わせをすることによってのみ、貨幣は需要そのものを代表できるのであって、けっして素材が金であることによって代表できるものではない⁵⁾。

このように考えると、マルクスがアリストテレスの均等性 (*isotes*) に同質性 (*Wesensgleichheit*) という訳語を当てたことの妥当性が疑わしくなってくる。

II 均等性 (*isotes*) と同質性 (*Wesensgleichheit*)

マルクスが、アリストテレスを価値形態論の始祖としたのは、アリストテレスが労働の同質性に気づかないまでも、なんらかの同質性の存在を自覚していたからである、と自己に引きつけて理解したからに他ならない。しかし、これはマルクスの誤解以外のなにものでもない。しかも、この誤解は後世にまでずっと受け継がれた。たとえば、等置される二つの商品に共通に存在するなんらかの同質性を見るという誤りはアリストテレス以来のものであると指摘したメンガーにせよ (Menger, [23], S. 173; 邦訳, 173ページ), 共通のものを発見するというアリストテレス的な手法がマルクスの誤りであるとしたM. ブローグにせよ (Blaug, [5], p. 248; 邦訳, 344ページ), あるいは、アリストテレスと同様の誤りにマルクスも取りつかれていたとする『十大経済学者』の時代のシュンペーターにせよ (Schumpeter, [34], p. 27; 邦訳, 44ページ), 多くのアリストテレス解釈は、マルクスの眼を通したものであって、アリストテレスの原典に即したものではない。望月俊昭氏がこのことを的確に指摘されている。

「マルクスの〈価値形態〉論では、アリストテレスその人の *isotes* 論がマルクス自身の *Wesensgleichheit* 論に即して焼き直されて論じられている」 (望月俊昭, [24], 186ページ)⁶⁾。

6) 望月俊昭氏は、『経済学批判要綱』時代のマルクスには、諸商品の間に本質の同一性がある／

実際、アリストテレスの均等性 (*isotes*) の内容とマルクスの同質性 (*gleichheit*) の内容とはまったく異なる。少なくとも、アリストテレスの *isotes* の概念は同質性とは完全に異なったものである。

『ニコマコス倫理学』は『正義』の問題を中心テーマにしたものである。引用文5に見られるように、他者との関わりにおいて『善』であるものを彼は『正義』と定義し、その関連を改めて問う必要のない『善』を『徳』と定義する。

(引用文5)「あらゆる徳のうちで正義のみは『自己のものならぬ善』だとも考えられている。……正義は徳の一部ではなく徳の全般である。……両者(正義と徳)は同じものであるが、その観点において異なる。他人への関連において見られるかぎり正義であり、こうした関連を離れて単にこのような『状態』として見られるかぎり徳なのである」(Aristotle, [3], 1130 a 3-13; 邦訳, 102ページ)。

さらにアリストテレスは普遍的な正義と部分的な正義とを区別し、後者を分析の課題とする。つまり、共同体的国家の枠内における人間行動の規範が問題とされている (*Ibid.*, 1130 a 3-16; 邦訳, 102ページ)。そこで問題にされるのは、分配の正義と修正の正義である。分配の正義とは共同体構成員間の名誉, 善, 財産の配分が比例的に配分されることであり, 修正の正義とは初期の配分が誤ったときにそれを修正する正義である。修正する態度にはやむをえずに強制される場合と, 自発的に修正の要請に応じる場合とに分かれる。

(引用文6)『正しい』配分とは、これらの(交渉当事者間の)人々と事物との間に同一の均等性 (*isotes*) をもつことである。言い換えれば、事物の間における比と同じ大きさの比が、人と人との間にあることが正しい。もし、当事者が均等な人々でないならば、彼らは均等なものを取得すべきではない。

＼がために、通約可能であることをアリストテレスが言ったという指摘もなく、そもそも、「質的に等しい」との語句もアリストテレス論において見られないということを論拠に、マルクス自身の価値形態論の深化とともに、アリストテレスの読み込みが進行してしまったのだらうと指摘されている(望月俊昭, [24], 185-86ページ)。

このことから、均等でない人々が均等なものを取得したり配分されたりするようなことがあれば、闘争や悶着が生じる (*Ibid.*, 1131 a 21-25; 邦訳, 104-105ページ)。

(引用文7)『正義』ということは、少なくとも四項からなる比の均等性のことである。つまり、人と人、配分されるべき事物と事物との間における区分が均等な区分である。だから、A項がB項に対するのはC項がD項に対するごとくであるだろうし、これを置換したA項のC項に対するはB項のD項に対するごとくであろう。……『正義』とはこのように比例に即していることである。これは数学者が幾何学的比例と呼んでいるものである」(*Ibid.*, 1131 b 3-12; 邦訳, 105ページ)。

(引用文8)「残りのいま一つの種類の『正義』は、自発的、非自発的なものもろの交渉における修正的なものである。この『正義』は、先述のそれとは異なった形態をもっている。……その『正義』はもちろん一種の均等性……ではあるが、それは先述のような比例に即しての均等性ではなく、算術的な比例に即するものである。……修正的な『正義』とは、利得と損害との『中』でなくてはならない。……裁判官は均等を回復するが、たとえば彼は一つの線分が不均等な二つの部分に分かたれている場合に、全体の半分を越える分だけ大きな方の部分から取り去って、小さい方の部分に付け加えてやるようなものである。全体が折半されるに至ったとき、『自己の分を得た』という。それが均等なものを得ることだからである。『均等』とは、ここでは算術的比例に即しての、多と少との『中』のことに他ならない」(*Ibid.*, 1131 b 25-1132 a 30; 邦訳, 106-107ページ)。

幾何学的比例とは人と物との等比のことであり、算術的比例とは算術的な平均のことである。ここで注意されなければならないことは、アリストテレスが交換される物の同質性を念頭においていないこと、その交換も等量によるものを正義と見るのではなく、むしろ、人の差異性に応じた配分、つまり比例的配分を正義としていることである。正しい配分とは数量的な平等を指すものでは

ない。人々の評価に応じて幾何学的な比例関係に即して行なわれる配分が正しい配分である。等量性が問題になるのは、誤って配分されたものを修正するときにおいてのみであり、等比的配分が最初の正義であるという原則に変わりはない。露骨に表現すれば、人の格差に応じた物の配分が行なわれるべきであるとする。この点は、同質性に引きつけてアリストテレスの交換論を見る『経済分析の歴史』時代のシュンペーターやマルクスの誤解を糾すためにも確認されておかねばならない。

この点を鮮明に表現する章句は、アリストテレスのピタゴラス派批判に見られる。互惠平等の分配を正義としたピタゴラス派に対して、アリストテレスは、それだけでは不十分であるとして、つぎのように批判する。そこには、上記のような一種の差異性の強調（等量性の否定）が見られる⁷⁾。

（引用文9）「一部の人々は、『互惠性がある』ことをそのまま『正義』

7) 少なくとも言えることは、アリストテレスが自分の時代に反抗していたことである。彼はフィリップ王、アレキサンダー王の治世に批判的であったし、その結果出てきたポリスにも批判的であった。当時繁栄を見せていた商業や蓄財の問題をも彼は無視できたのである。シュンペーターは、価格に関する倫理観が市場メカニズム分析を可能にさせた、としてアリストテレスを評価するが (Schumpeter, [33], p. 60; 邦訳, 第1分冊, 118-19ページ), しかし、アリストテレスの関心が価格分析にあったわけではない。

マルクスと同じく、シュンペーターも、どの時代にも特有の経済問題があることを熟知しながらも、ことアリストテレスに関しては、時代が十分に成熟していなかったと免責している (Ibid., p. 65; 邦訳, 第1巻, 128ページ)。しかし、*The Economics of Ancient Greece*, Cambridge, 1957 というタイトルをもつ H. Michell の著作では、農業、鉱山、労働、工業、商業、貨幣、銀行、財政という章編成になっていることから明らかなように、アリストテレスの生きた紀元前4世紀にはギリシャの経済社会は十分に成熟していたと見なしてもよい。ポランニーが提起した substantivist と formalist との論争は歴史分析をめぐる方法論争であったが、それは、経済の存在を巡るものではなかった。少なくとも経済は存在していた。ポランニーは言う、「経済そのものではなく、経済の概念が未確定であった」のが古代の姿だったのである (Polanyi, [30], p. 86)。しかも、その経済を担っていたのは市民ではなかった。土地の保有が許されないために、外国貿易なり工業なりを営むことによって市民の生活資料を供給した外国人が経済を担っていたのである。このような経済が外国人によって営まれているときに、アリストテレスが経済現象を共同体成員の問題として論じようとしなかったのもけだし当然のことであろうし (Finley, [10], p. 25)、人間労働一般の同質性を見るよりも、共同体構成員間、および構成員とそうでないものとの間に共同体維持における貢献によって差異性を見ようとしたのも、当時の時代背景からすれば、十分首肯できるのではないだろうか。重要なことは、アリストテレスに階級差別観を見るのではなく、共同体維持のために経済を制御しようとするさいの、貨幣の位置づけに関する彼の二重的理解（必要性和恐怖）を読み取ることではないだろうか。

であると考えている（注：ピタゴラス派の人々のこと）。……しかし、なんの条件もなしに互恵性を言っただけでは、配分的な『正義』の次元に適合しないし、修正的な『正義』の次元にも同じく適合しない。……というのは、もし支配者の位置にある人が殴打した場合には、彼は殴打をもって報いられることを要しないからである」（*Ibid.*, 1132 b 22-30; 邦訳, 108ページ）。

つまり、共同体的な関係を維持するためには、交換が必要であるが、それはあくまでも配分における均等性という共同体維持の原則の枠内にとどまるものでなければならない。その場合の正義とは、等量交換ではなくて、比例的交換でなければならないのである。

（引用文10）「しかし、交換的な性質をもつ共同関係においては、このような『正義』がその楔になっていることは事実である。ただし、その場合でも『正義』とは比例に基づくところの互恵的なものであって、単純な等量性に即してのそれではない」（*Ibid.*, 1132 b 32-35; 邦訳, 108ページ）。

（引用文11）「比例的な互恵性が実行されるのは対角線的な組み合わせによる。Aは大工、Bは靴工、Cは家屋、Dは靴。この場合、大工は靴工から靴工の生産物のあるものを獲得し、その見返りに自分は靴工に自分の生産物のあるものを給付しなければならない。したがって、まず両者の生産物の間に比例に即する均等性が存在し、その上で取り引きの互恵性が実行されることによって、正しい事態は初めて実現されるであろう。もし、そうでないならば、取り引きは均等的ではなく維持されもしない。事実、一方の生産物が相手方の生産物以上のものであるような事例は十分ありうる。だからこそ、両者の生産物は均等化される必要がある」（*Ibid.*, 1133 a 8-13; 邦訳, 108-109ページ）。

アリストテレスの *isotes* が、マルクスの同質性と意味内容を異にすることは明白である。アリストテレスのこの面での *isotes* を踏襲するのはジンメルである。ある商品と別の商品との交換において、ある数量的な関係が成立したとしても、そこに直ちにマルクスのような同質性を見る方法をジンメルは疑う。

「しかし、だからといって、両者の間になんらかの質的關係もしくは同質性 (Gleichheit) が存在する必要はない」(Simmel, [35], S. 103; 邦訳, 157-58ページ)。

「二つの定量の変化、差異、關係が測定されることになっている場合には、測定する実体の間の比例が、測定される実体の間の比例のうちに反映することによって、後者を完全に規定するというだけで十分であって、二つの実体そのものの間になんらかの本質的同質性 (Wesensgleichheit) が存在する必要はない。したがって、等置されうるのは、質的に異なった二つの事物ではなくて、それぞれ質的に異なった二つの事物の間の二つの比例なのである」(Simmel, [35], S. 103; 邦訳, 158ページ)。

つまり、二つの事物の間に同質性があるのではない。同質性をもたない両者が第三者を介して比較、計量されるだけのことである。直接に当事者間で比較できないものを第三者を介して間接的に比較するという方法は、「人類がなしとげたもっとも偉大な進歩の一つ」(Simmel, [35], S. 120; 邦訳, 182ページ)であり、貨幣の意義もそのことをはたす機能にある。貨幣にそのような機能をはたせるものこそ、「諸事物そのものが同質性や類似性をもっていない場合でも、諸事物の諸關係を等置することができるという発達した精神がもつた能力である」(Simmel, [35], S. 122; 邦訳, 184ページ)。

商品に具体化されている共通の要素が通約可能性をもたらすのではなく、貨幣に対する共通の關係がそれをもたらすのである。その意味においてのみ「均等化は、ある共通の基準に基づく比較によって行なわれなければならないのである」(Monroe, [25], p. 9) というのがアリストテレスの見解であると思なす方が、アリストテレスを価値形態論的に理解するよりも素直な解釈であろう⁸⁾。

8) すべての商品が、価値としては対象化された人間労働であるゆえに通約可能であるとしたマルクスの手続きの不十分さを指摘したのは宇野弘蔵であった。

「諸商品は、そのままて〈通約〉しうるものとはならない」(宇野弘蔵, [42], 50ページ)し、「これでは貨幣によるいわば外部からの〈通約〉の要請……が不明確になる」(同上, 50ページ)。等置される二商品の同質性とは、「交換關係を通して比較計量せられつつ要請せられ、確立されるという、いわば社会的に形成せられる同質性」(宇野弘蔵, [43], 186ページ)に他ならぬ。

周知のように等置される両者に共通に存在する属性を求めるというマルクスの方法は、広範な批判者を生み出してきた。たとえば、ベーン＝バヴェルクは、マルクスの手順そのものは「いささか奇異であるが、それ自身は排斥されるべきものではない」(von Böhm-Bawerk, [6], S. 384; 邦訳, 119ページ)が、「交換における真に〈共通なもの〉は、……マルクスによって行なわれたのとは異なる方向において求められるべきである」(*Ibid.*, S. 429; 邦訳, 189ページ)と、推論の方法自体は認めながらも、「交換されるべき諸価値の等価という旧いスコラ神学的な観念」に毒されているとマルクスを批判した(*Ibid.*, S. 383; 邦訳, 118ページ)。

メンガーにいたっては、マルクスの価値形態論そのものを拒否した。共通の本質などは存在しないにもかかわらず、多くの研究者が諸財貨の等価物を発見しようとしてきたことは、「我々の科学にとって計り知れないほどの不利益をもたらした」(Menger, [23], SS. 172-73; 邦訳, 171-72ページ)とまで言う。

このような言説は形を変えながらもいたるところで、いたる時代に出されてきたものであり、その多くの場合がマルクスに対するイデオロギー的反感から出されたものであることは否定できないだろう。しかし、そこには、マルクス批判を行なうことによって、はしなくも表現されることになった、社会の人為的な制御という思想が表現されているのではないだろうか。人間の経済行動には、いつの時代でも慣習、時代精神に制約されているにもかかわらず、経済学は、ともすれば市場原理に基づく経済行動の集合体が爆発的な力で社会をつき動かしている、と思い込んできたのではなかったか。経済の客観的な法則を探るという意識の前提には、あらゆる政策、慣習の制約を爆破して、市場の力が自らの原理を暴力的に表現するとの我々の思い込みがあったのではないだろうか。

↘ず。ここで要請される貨幣は、そのままでは、価値表現を示すことも、それによって把握することも、価値を現わす第三者たることもできない、として氏はマルクスの価値形態論の性急さを諷めたのである。

労働の同質性に価値論の基礎を置くことは、確かに機械制大工業社会における資本家的生産体系を認識する重要な要素である。しかし、それ自体が一つの時代精神を反映した認識様式、ないしは自己了解の様式であると思われる。異質なものを均等化する作業を、同質の抽象的人間労働力に求められること自体が、時代の具体的な要請であり、その意味においての時代の産物、時代の制約の一つだったのである。労働の同質性を見なかったのは、アリストテレスが奴隷制社会の制約を受けていたからであることには違いないが、それは、社会的発展の未熟さを反映していたからではなく、アリストテレスが市場原理を社会編成原理の下位に置き、それを制御しなかったからに他ならないのではないだろうか。むしろ、抽象的労働の同質性に基礎的価値視点を置き、貨幣を一般的等価物と見なしたマルクスこそ、貨幣、しいては経済の制御に接近する手掛かりを無視したのではなかっただろうか。しかし、合意の産物としてのノミスマの含意は、市場の制御が必要となってきたいつの時代にも、繰り返し表現されてきたのではないだろうか。

参 考 文 献

- [1] Alter, Max, "Aristotle and the Metallist Tradition: a Note", *History of Political Economy*, Vol. 14, No. 4, Winter 1982.
- [2] Andreades, Andreas M., *A History of Greek Public Finance*, Vol. I, revised edition, translated by Carrol N. Brown. Cambridge, Mas., Harvard University Press, 1928.
- [3] Aristotle, (W. D. Ross ed.), *The Works of Aristotle*, Oxford University Press, Vol. IX, *Ethica Nichomachea*, 1915.; 邦訳、高田三郎訳、『ニコマコス倫理学』（『世界の大思想』、第20巻、『アリストテレス』）、河出書房新社、1974年。
- [4] ———, Vol. X, *Politica*, 1921.; 邦訳、山本光雄訳、『アリストテレス、政治学』、岩波文庫、1961年。
- [5] Blaug, M., *Economic Theory in Retrospect*, Homewood, Illinois, 1962.; 邦訳、杉原四郎・宮崎犀一訳、『経済理論の歴史』、東洋経済新報社、1968年。
- [6] von Böhm-Bawerk, Eugen, *Zum Abschluss des Marx'schen System*, in Eugen von Böhm-Bawerks kleinere Abhandlungen über Kapital und Zins (*Die gesammelte Schriften*, Bd. 2), Wien und Leipzig, 1926.; 邦訳、木本幸造訳。

『マルクス体系の終結』, 未来社, 1979年。

- [7] Cannan, E., Ross, W. D., Bonar, J., Wicksteed, P. H., "Who Said Barren Metal?", *Economica*, No. 5, June 1922.
- [8] Castoriadis, Cornelius, "From Marx to Aristotle, from Aristotle to Us", *Social Research*, Vol. 45, No. 4, Winter 1978.
- [9] Clagett, Marshal, *Greek Science in Antiquity*, New York, Abelard-Schuman, 1955.
- [10] Finley, Moses I., "Aristotle and Economic Analysis", *Past & Present*, Vol. 47, May 1970.
- [11] Gomperz, Theodor, *Greek Thinkers: a History of Ancient Philosophy*, translated by Laurie Magnus and George G. Berry from the German edition of 1896, New York, Humanities Press, 1955.
- [12] Gordon, Barry J., "Aristotle, Schumpeter, and the Metallist Tradition", *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 75, No. 4, Nov. 1961.
- [13] _____, "Aristotle and Hesiod: The Economic Problem in Greek Thought", *Rev. Soc. Econ.*, Vol. 11, Sept. 1963.
- [14] _____, *Economic Analysis before Adam Smith: Hesiod to Lessius*, New York, Harnes & Noble, 1975.
- [15] Herodote, *Herodoti Historiae*, 2 vols, edited by C. Hude, Oxford Classical Texts; 邦訳, 松平千秋訳, 『ヘロドトス歴史』, 岩波文庫 (全3冊), 上巻。
- [16] Jaffe, William, "Edgeworth's: Contract Curve: Part 2. Two Figures in its Protohistory: Aristotle and Gossen", *History of Political Economy*, Vol. 6, No. 4, Winter 1974.
- [17] Kern, William, "Returning to Aristotelian Paradigm. Daly and Schmacher", *History of Political Economy*, Vol. 15, No. 4. Winter 1983.
- [18] Lewis, Thomas, J., "Acquisition and Anxiety: Aristotle's Case against the Market", *Canadian Journal of Economics*, Vol. 11, No. 1, Feb. 1978.
- [19] Lowry, S. Todd, "Aristotle's Natural Limit' and the Economics of Price Regulation", *Greek, Roman and Byzantine Studies*, Vol. 15, No. 1, Spring 1974.
- [20] _____, "Recent Literature on Ancient Greek Economic Thought", *Journal of Economic Literature*, Vol. XVII, March 1979.
- [21] Marx, Karl, *Das Kapital*, Bd. 1, in *Karl Marx, Friedrich Engels Werke*, Bd. 23, Berlin, 1975.; 邦訳, 向坂逸郎訳, 『資本論』, 岩波書店。
- [22] Meek, Ronald L. and Skinner, Andrew S., "The Development of Adam

- Smith's Ideas on the Division of Labour", *Economic Journal*, Vol. 8, No. 332, Dec. 1973.
- [23] Menger, Carl, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, in *Carl Menger gesammelte Werke*, Bd. 1, 2 Aufl., Tübingen, 1968.; 邦訳, 安井琢磨訳, 『国民経済学原理』, 日本評論社, 1937年。
- [24] 望月俊昭, 「価値形態論における『本質の同等性』について」, 『経済研究』(成城大学), 第75号, 1981年10月。
- [25] Monroe, A. E., *Monetary Theory before Adam Smith*, Cambridge, Mas., 1923.
- [26] ———, *Early Economic Thought*, London, 1924.
- [27] de Montchretien, Antoine, *Traite de l'oconomie politique*, 1615.
- [28] Plato, *The Collected Dialogues of Plato*, edited by Edith Hamilton and Huntington Cairns, Bollingen Series, No. 71, New York, Pantheon Books, 1961, *Statesman*, translated by J. B. Skemp.
- [29] ———, *The Laws*, translated by R. G. Bury, Harvard University Press, 1952, Bk. V.
- [30] Polanyi, Karl, Arensberg, Conrad M. and Pearson, Harry W., eds., *Trade and Market in the Early Empires: Economies in History and Theory*, Glencoe, Ill.: Free Press, 1957.
- [31] ———, *Primitive, Archaic, and Modern Economies*, edited by G. Dalton, Garden City, N. Y., 1968.
- [32] Roll, Eric, *A History of Economic Thought*, 3rd edn, London, 1954.
- [33] Schumpeter, Joseph, *A History of Economic Analysis*, edited by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954.; Allen and Unwin, 1959.; 邦訳, 東畑精一訳, 『経済分析の歴史』, 全7巻, 岩波書店, 1955年。
- [34] ———, *Ten Great Economists from Marx to Keynes*, New York, 1951.; 邦訳, 中山伊知郎・東畑精一郎監修, 『十大経済学者』, 日本評論社, 1952年。
- [35] Simmel, Georg, *Philosophie des Geldes*, München und Leipzig, 1920.; 邦訳, 元浜晴海・居安正・向井守訳, 『貨幣の哲学』, 分析編, 白水社, 1981年。
- [36] Singer, Kurt, "Oikonomia: An Inquiry into the Beginnings of Economic Thought and Language", *Kyklos*, Vol. II, No. 1, 1958.
- [37] Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, London, A. Millar, 1759.
- [38] ———, "The History of the Ancient Logic and Metaphysics", in *Essays on Philosophical Subject*, London, T. Cadell and W. Davies, 1795.

- [39] Soudek, Joseph, "Aristotle's Theory of Exchange: an Inquiry into the Origin of Economic Analysis", *Proc. Amer. Philos. Soc.*, Vol. xcvi, No. 30, 1952.
- [40] _____, "Leonardo Bruni and his Public: A Statistical and Interpretative Study of his Annotated Latin Version of the (Pseudo-) Aristotelian Economics", in *Studies in Medieval and Renaissance History*, Vol. V, edited by William M. Bowsky. Lincoln, University of Nebraska Press, 1969.
- [41] Spiegel, Henry W., *The Growth of Economic Thought*, Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall, 1971.
- [42] 宇野弘蔵, 『マルクス経済学原理論の研究』, 岩波書店, 1959年。
- [43] _____, 『経済学方法論』, 東京大学出版会, 1962年。
- [44] Will, Edouard, "De l'aspect éthique des origines grecques de la monnaie", *Rev. Hist.*, Vol. ccxii, 1954.
- [45] Xenophon, *Cyropaedia*, translated by Walter Miller, New York, Macmillan, 1914.